

象徴的に語られる「子ども」の機能

— 2つの地域の祭をめぐる語りを例に —

伊藤雅一（千葉大学大学院）

1. はじめに

「地域社会と教育」というテーマにおいて、「子ども」は地域社会での「社会化」（住田 2001）や、地域社会で大人と「共同し参画」（佐藤 2002）する対象として論じられてきた。地域社会における教育の必要性の一方、地域社会の側は教育の受け皿として機能するのだろうか。そもそも「子ども」が地域社会においてどのように構成されているのだろうか。

「子どものため」と語られる同じ地域における2つの祭を例に挙げ、象徴的に語られる「子ども」の機能について検討する。昨年の学会発表では2006年に始まったイベント的な新興の祭のみ取り上げたが、今回は神社の存在を前提とした伝統的な祭と比較しつつ、双方の祭に関わる人々の語りやメディアに表出する「子ども」に焦点を当てる。ここでの「子ども」観から見出せる、教育空間として自明視されていない場（地域）において観察される教育観の考察を目指す。

2. 調査方法

発表者は、2009年から新興の祭のスタッフとして関わりつつ、参与観察とインタビューを中心とした質的調査を継続している。

3. 2つの祭の概要

東京から快速電車で30分ほどの郊外にあたる千葉県千葉市の稲毛という地域に焦点をあてている。以前は海に面した半農半漁の村であり、海を中心とした保養地・観光地であったが、1961年の埋め立て事業開始以降はベ

ッドタウン開発された。

・新興の祭：稲毛あかり祭「夜灯」（よとぼし）

稲毛地域のせんげん通り商店街を中心に、晩秋の11月末に祭を開催している2006年から始まった新しい祭「夜灯（よとぼし）」は、夜中にカンテラをかざしつつ行った遊びに近い「夜灯漁（よとぼしりょう）」の光景にちなんで、手作りの灯籠を稲毛地域の道や公園に並べる祭である。祭は、せんげん通り商店街の店主たちが中心となって運営している一方、祭の観客はベッドタウンとして住まう人々が中心となっている。

・伝統的な祭：稲毛浅間神社大祭

稲毛の浅間神社は808年から続く「1200年の歴史を誇る」神社である。「子守りの神様」として地元民に親しまれ、7月14・15日の大祭では、約500店舗の露店が並び約30万人の人流でにぎわうと言われている。

4. 祭における「子ども」

夜灯では、幼稚園や4つの小学校において「ワークショップ」（夜灯漁に関する紙芝居を聞く＋灯籠の絵柄を描く）が行われ、子ども達が灯籠作りに参加している。祭の当日は子どもの描いた灯籠を家族連れで見に来る客を中心ににぎわう。夜灯の運営に携わる商店街の人々は、「海の記憶」や夜灯の運営を受け継ぐ対象として「子ども」が語られている。

一方の浅間神社大祭では、稚児行列に参加する子ども達もいるが、その他の大半は露店

での買い物客である。ところが、2013 年の大祭は、神社・警察・露天商の三者の行き違いにより露店が全く出店しない事態が起こり、新聞やテレビでも取り上げられた。この後、地元の自治会や商店街が中心となって結成された「稲毛せんげん通りまつり実行委員会」によって、2014 年の大祭では約 500 店舗の露店が復活した。

2013 年から 2014 年にかけての大祭関連活動によって大祭開催の掲げる象徴が「神様」から「子ども」へシフトし、語られる「子ども」は、語り手（地元民）の子ども期に経験した浅間神社大祭が投影されていた。

5. 結果

2つの祭に共通しているのは、(露店などの)祭の雰囲気を味わう対象としての「子ども」が想定されている点である。どちらの祭も祭当日を楽しむことが望まれ、実際の子どもの姿を見ても楽しんでいるように見える。

2つの祭の差異として挙げられるのは、夜灯には準備の段階（紙芝居を聞く、灯籠に絵を描くなど）から実際の子どもの関わっていることである。新興の祭を行うに当たっての理念に触れている。ただ、運営側が望んでいる祭運営の受け継ぎに至る子どもは今のところ見当たらない。

新興の祭「夜灯」における「子ども」は、祭の理念に組み込まれたものであり、記憶された経験の受け継ぎ先として見出されている。

一方、伝統的な祭「浅間神社大祭」では、露店が出ないという非常時に「子ども」という共有できる象徴があったことで普段は別々の諸団体が1つの委員会を構成した主因と言える。ここでの「子ども」は経験された経験の受け継ぎ対象であり、各語り手自身の「過去としての子ども」が反映されている。

6. 結論

祭の運営者たちが「子ども」について語り、さらには何か（祭、海の記憶、地域の誇りなど）を受け継ぐ対象として「子ども」を見ていることは、運営者たちが「子ども」に対して教育的意図を持っていると解釈できる。これは、教育空間として自明視されていない場（地域）において観察される教育観として見出せる。その一方、何かを受け継ぐ再生産機能を希求される「子ども」と実際に地域で生活する子ども自体とのズレが解消されたわけではない。何かが継承されると想定され望まれているのみで、実存としての子どもには教育的意図が伝わっているのか分からない。語られる「子ども」の「虚構」（元森 2009）や、「子どものため」という論理が「子ども不在」（高久 2014）であるという指摘の通りとも言える。

それでも祭は続いていくのは、自治会や商店街など地区割り団体のコンフリクト（緊張関係）が宙吊りになるのが祭であり、その背景として「子ども」が語られることが作用していると考えられる。特に「経験された子ども」が強く規定しているのではないだろうか。

<参考文献>

- 住田正樹,2001『地域社会と教育 子どもの発達と地域社会』九州大学出版会.
- 佐藤一子,2002『子どもが育つ地域社会 学校五日制と大人・子どもの共同』東京大学出版会.
- 元森絵里子,2009『「子ども」語りの社会学 近現代日本における教育言説の歴史』勁草書房.
- 高久聡司,2014『子どものいない校庭 都市戦略にゆらぐ学校空間』勁草書房.